

天然力を活用した風倒被害地の再生

十勝西部森林管理署東大雪支署糠平森林事務所
十勝西部森林管理署東大雪支署

一般職員 本間伸一郎
一般職員 平門由佳子

趣旨と現況

平成29年11月、上士幌町三股地区国有林において、風倒被害が発生しました。その後の更新及び虫害状況の推移を観測したので、その結果を発表するとともに、今後の森林遷移を考察します。

この被害地の現況は、トドマツ及びエゾマツの天然林で林齢120～140年(※年輪計測調査より)、クマイザサが密生しています。被害区域面積は46.23ha、被害本数は約2万本で被害材積は約6千m³となっています。

いよ支署を考慮は、欄響地危害察繼擇林虫害等の発生指留意れでつ、伐採搬出をせずにその推移を見守ることとしました。



206は林小班(平成29年11月15日撮影)

更新・虫害状況



幼樹の生長量比較

被害地の任意の地点において、まず更新調査を行いました。森林施業の手引きを参考に更新指数を計測したところ、被害地の更新指数は0～0.3となりました。

風倒から一年経過していないこともあり、更新状況はよくありませんでしたが、樹冠が開いた箇所では光環境が改善し、平成29年と比べて幼樹の生長量が増加していました。

また、虫害調査は、穿孔等から虫害の恐れがある樹木を選定し、その樹皮を剥いで行いました。トドマツ、エゾマツの倒木共に虫害がみられ、8月から9月の一ヶ月で虫害が進んでいました。しかし、周辺の立木への虫害は確認されませんでした。

比較：洞爺丸台風被害

昭和29年の洞爺丸台風によって旧上士幌営林署管内音更事業区(現在の三股、幌加地区)で約100万m³の森林被害が発生しました。当時、他の営林署も同様に大規模な森林被害があり被害木の早期搬出が行われました。被害の大きかった三股地区においては、ササの植生高が低く、倒木更新に適した立地条件と周辺の母樹の状況から天然更新が盛んで、大部分が天然更新で復旧が行われました。

現在では雄大な天然林が広がっています。



復旧した三股の森林



平成30年8月24日(左)と9月20日(右)エゾマツ虫害の比較

今後の展望

更新状況や虫害状況、洞爺丸台風による被害から現在までの森林への復元の様子から、引き続き天然力を活用した森林の再生が可能と判断しました。

しかし、被害区域内の立木や区域外へ虫害の発生がないか留意しつつ、今後とも継続して調査していくことが重要であると思えます。



無人航空機による空撮